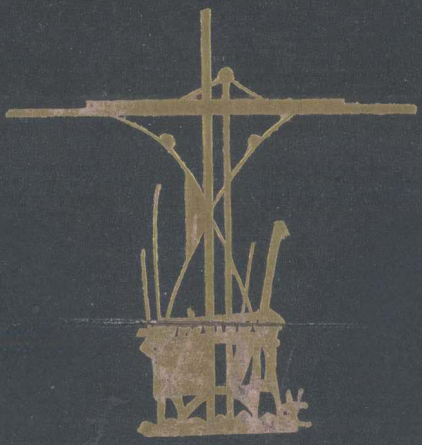

夜と昼の鎖

小島信夫

講談社版

夜と昼の鎖

著者の了
解により
検印廃止

昭和34年12月25日　第1刷発行

¥290

著者　小島信夫（こじまのぶお）

発行者　野間省一

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

発行所　東京都文京区音羽町3～19　株式会社講談社

落丁本乱丁本はお取りかえいたします。　（製本・大製）

© Nobuo Kojima 1959. PRINTED IN JAPAN

目次

第一章……14
第二章……28
第三章……50
第四章……76
第五章……135
第六章……181
第七章……219
あとがき……268

装幀　関野潤一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夜と昼の鎖

＊　＊　＊

私がその村へくるようになってから、もう四年になる。私の目的は、鮒つりや鴨うちで、鮒はその村をとりまいている大運河ともいうべき川をさかのぼって行くとかなりの漁場がある。さらにその川を一里のぼり水門によってまた別の運河に入り、小半みちいったところから湖がひろがって、恰好な鴨打の場所である。

私を紹介したのは、今では運河村とよばれている村にある、女学校の校長をしていた山名氏が、私とあったときに村へ出かけてくるようにさそったからで、当時彼は知事選挙に立候補のうわさもあるところで、ことによると、私をその選挙のたしにしようと思っているのではないか、とおくそくしたが、私は彼の学校で生徒に講演をたのまれただけで、私の方が山名氏に世話になりっぱなしであった。

山名氏は、その学校から別の学校にうつったが、その頃オリンピック大会があると、団長にえらばれて外国へ出かけたかと思うと、帰国後、予備校を東京に作って、私に教師の世話をたのみにきたこ

とがある。しかし彼は東京にいるわけではなく、神出鬼没で、人物などいやしないと小説家などが口にする当今には、めずらしい男で、私自身が今夜話していても、明朝彼がどこへ何しに出かけるのかまったく想像もつかないというありさまであった。

彼がこの村を去ってからも、私は年に二、三度村を訪れて、気が向けば、一週間も滞在したが、私の宿は村の中央にある、ウワサ屋という屋号をもった雑貨店であった。もちろんこの家に泊るようになったのも、山名氏の指図で、そこでなら自炊をすることも出来る。ウワサ屋の主人は、ウワサ屋とよばれていたが、私の将棋のほどよい相手で、店に客がきても一人娘にまかせっきりであった。客もまた心得たもので、品物を買うのか、彼に話しこみにくるのかわからぬくらいでかならずといっていいくらい、あがりこんでくる。客は女よりもむしろ男が多い。それがすでにおかしい話で、何といっても彼らは談じこみにくるのだ。

奥の間はその談じこみにくる百姓たちのために開放されていて、時に酒宴がひらかれるという段取りになるのも、すべてその店の伝統であるらしい。

山名氏が私を「ウワサ屋」に紹介したのは、経費がかからぬという理由ばかりではなく、小説家である私が、この店に興味をもつであろうと思ったからだ、と私はあとになってきがついた。事実、その村には鴨水館という旅館が一方の水門のわきにあって、都会からの釣客はここで一泊して夜明けに川へ出るのである。

私はこの旅館にも泊ったことがあるが、ウワサ屋が私を最初から開放して私が村の住人であるかの

ようにとりあつかい、というより、まるで私が空気でもあるように、私の存在を意識しないのに反して、二十五、六になる、色の白い女みたいな男であったが、縁なし眼鏡をかけていて、キチンと着物をきて角帯をしめている鴨水館の主人は、私が山名氏の知人だというので、私に根掘り葉掘り山名氏の動静についてきいたり、特別の接待をさせていただきますと称して、女中任せはしないで、いつも食事時には、私のそばをはなれない。私が学校の教師とつきあうのをひどく気にしていて、私がある教師の名をあげると、首をかしげて、よした方がいいといった様子をする。この主人は先代になくなられて数年になるが、その頃からの中年の女中に一切の世話をさせて、結婚の気配がないのが、何だか私には不潔に思われてならなかった。こんなわけで最近ある事情でウワサ屋からそういい出されるまではウワサ屋から鴨水館にうつることはしなかった。

ウワサ屋にはこのように人が集るので、村の話は問わず語りに、よそ者の私の耳にもはいってくることもあるが、鴨水館主人は二十歳の頃、ソウウツ病にかかり、自分があらゆる病気の持主であることを話しはじめた。盲腸から胃ガンから、心臓病から、神経病から次々と病名を父親に訴えた。彼が名をあげないのは、かんじんのソウウツ病だけといってもいいくらいである。

そのためにこの若者は、悪くもない腹を切らせたが、A町へ病院通いをする習慣だけはのこった。この村に診療所ができて、伊沢幸子という女性が初代の所長になってからは、しばらく診療所に通いはじめたが、彼女が「あなたのいう部分にはどこも異状はない」といってから、彼は腹を立ててこの診療所に行くのをやめてしまった。それまでの町の医者は、彼の病名をそのままうけいれて、かなり

の金をしぼりあげていたのだ。

じっさいは彼は、A町の病院の看護婦が目あてでしぜんと病気になったというわさもあり、彼が診療所へ出かけたのは、伊沢幸子を好いていたのだ、という説もある。私が村へ来はじめの頃であったが、このうわさをいくぶん裏書きするようなことがおこった。ある日、この主人はウワサ屋へ現われて、「おれはこれから町の女のところへ行く」といって豪語した。誰も彼に女がいてわるいと思っている者はないのに、彼が吹聴するので、ちょうど遊びにきていた近所の床屋が駐在所へ電話をかけた。駐在はすぐ山名氏に電話した。山名氏が制服の巡査といっしょにあらわれるまでは、彼の眼はすわっていたが、長身の山名氏が大またで、ウワサ屋に入りこんでくると、急に眼をつぶり、安心したように眠りこんでしまい、イビキさえかきはじめた。

私はそのとき、事の次第はよく分らぬままに、彼が山名氏をいかに信頼しているか、如実に知ったわけだが、山名氏は村を去るときに、近藤という教師に——この教師はこの若主人と小学校の同級生であったが、——力になってやれ、といいおいた。山名氏の言葉によると、この若者はまったく放任主義の父親が頼りなくて、ちゃんとした男を求めている。女中に育てられているために、その不平不満がウックツして出てきた病気なのだから、ということであった。その代り山名氏は在任中、鴨水館を自分の家以上に利用し、彼の交際費の大部分は、鴨水館がうけもつことになった。もっとも、これは近藤の意見を山名氏が利用したというふうにうがったいいかたをする者が今となるとでてきている。それは診療所長の夫、伊沢であった。私は彼が移動托児所を村に設置するのに尽力した男だ、と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

知っていたが、彼が農繁期に、今野という教員が倉を借りている、母屋の前の空地で、ちょうどその空地へ移動してきた托児所で、指示をあたえている姿を見たとき、あのうわさはほんとうであることを知った。私はその時、ふとしたことから、さっきの話を出したところ、伊沢は、「山名氏の欠点は、誰でも味方にしてしまうことだ」とつけ加えた。

近藤は村の出身であるが、伊沢夫婦はよそものである。いつだったか、私が講演をしたあとだったと思う。山名は主だった教師と私とをつれて、鶴見という教師のボートで運河を下り、大川へ出て、スズキの網漁をやり、舟の上でテンプラにして、食べたあと、鴨水館によって芸者をあげ、そのあと、運河をねってまわったことがある。山名は始終ヒワイな言葉を吐きつづけており、笑うべきことがあると、足を頭の上にまであげて、足で拍手のマネをした。そういう器用なことができるのは、年齢も四十前で長年スポーツできたえた体操教師あがりであるためだが、そうして足をたたきながら、彼の眼が、一座の者の眼をちゃんと意識しているのを知って、私は今更のようにおどろいたのである。

山名は私の眼を見て、よう、といって、一きわ高くはしゃいだ。それからすぐに眼を伊沢の方にうつして、「伊沢はこの村の救い神だぞ」と叫んだ。伊沢は何ごとか考えこんでいる模様で、自分の名をいわれて、びっくりしたように山名の顔を見た。ちょうどその時、何かが伊沢の唇のあたりにぶつかったと思うと、彼の唇の向ってすぐ右上のところから、血がふき出た。村の真中の運河の上のことである。山名の、「鴨水館、よさぬか」という声がした。その瞬間ボートはあやうくひっくりかえり

そうになった。伊沢は傷口をおさえて坐っていたが、「鴨水館」がよろよろと立ち上って、どすんと坐ったからであった。「鴨水館」が盃をななめにして伊沢になげたのであった。「鴨水館」は山名に大喝されておとなしくなったが、まだ病気中であるのに、同乗させた方がまちがっていることは、誰にも分っていた。(伊沢のこの傷は今でもまだのこっている)

私がこの小事件をあげたのは、ほかでもない、伊沢が傷口をハンカチでおさえながらいった言葉を読者の印象にとどめておきたいからだ。伊沢は、呟やくように鶴見に向ってこういった。「あなたは、何か誤解していますね」「誤解?」鶴見はけげんそうな顔をし、やがてうす笑いをうかべながら、チラッと近藤の方を見た。それから山名の方を見、こう呟やくように、伊沢にいった。「誤解というところをみると、君が誤解していますよ」

山名はとたんに、また歌をうたいだし足を叩いて、自分で喝采した。二人は黙ってしまったが、もしそうでなければ、山名は何かいったにちがいない。

私はウワサ屋に度々逗留したが、村人というものには、今考えてみれば、一種村の誇りというものがあるらしく、私がいるところでは、なかなか村の中のイザコザは口にしないものだ。「鴨水館」のことについては、それから村の運河での子供の溺死のことなど、鶴見が展覧会に何度入選したの、伊沢の家に最近ピンクのカバーのついたベッドが舟で運ばれてきたの、その後赴任してきた今野夫婦の奇妙な行いなどは、逐一洩してくれる。しかし、ある「微妙な話」については、私はついにほとんどツンボサジキにおかれたといっていい。そのくせ、私がこの小説を書くようになったのは、運河村の

人々が、ほとんど手にとるように、この「微妙な話」を知っていたからである。いうまでもなく、それには彼等ふうの解釈が大分加っているし、真相から遠いこともある。少くとも彼等は私に話していたよりは何倍も知っていたことだけは、たしかだ。

この物語にあたるイザコザがおこった夏、ウワサ屋を訪ねると、こんなことは初めてのことだが、道子も年頃になったので、といって逗留を断わられたので、私は鴨水館に泊ることにした。道子が年頃になったのは、この夏になって初めてというわけではない。私はふしぎに思っていたが、もう今ではほとんど常人とかわらない「鴨水館」が、予定の筋道であるかのように、私をよろこんで迎えいれた。

その夕方私が外の運河の水門のあたりをながめていると、堤防をつたって水門をこえ、近づいてくる男の姿が見えた。私は彼には何年もあっていないが、そのやせた猫背と秀でた額をした色の浅黒い彼の姿は、私に数年前のボートの中のことを思いおこさせた。彼は伊沢であった。彼はたしか案内も乞わずつかつかと私の部屋の前までやってきた。それから、私の名をよんだ。彼は「あなたがここへうつされたわけを知っていますか」と藪から棒にいった。それは礼を失しているというより、一つのことに思いつかれているように思えた。「あなた村のことを小説に書くといいですよ、私がデータを提供します」とつけ加えた。

山名氏もいつか私に、そういったことがある。というより、私が村のことを聞きにきた、といって教師に紹介した。その時彼は、山名氏を重要人物にした物語を書くようにとの示唆とも思えて、いい

かげんな返答をしていたが、伊沢は、しかし何か腹いせにいっているにすぎないことがわかった。事実彼はほとんど何も語らずに、私の部屋を去っていった。伊沢がガラス戸をあけて外へふみ出したとき、「鴨水館」が奥から出てきて、「『お先き走り』がまた宣伝にきやがった」といった。彼は奥へ走って行き、ふたたびあらわれたときは手に塩をつかんでいた。彼はその塩を戸口に向ってまいた。それから女中に向って、「明日の朝は用心しなさい、家のまわりに気をつけて」と叫んだ。女中は、たすきをとりながら出てくると、母親とも姉とも妹とも、女中とも、要するに何ともつかぬ様子で、心得たようにうなずいた。「あなたは伊沢の家へ行ったことがありますか」と「鴨水館」は二階にのぼりかけた私に、背後から問いかけてきたので、私はふりむいて一度行ったことがあると答えた。彼はうなずきながら、私たちは当分いそがしい、といった。「私たち」という意味が何であるか、伊沢もその中に入っているのか、いないのか知らんと思いながら、階段をのぼりつつ私は伊沢の家を訪ねた時のことを思い出した。

ヘントウ腺をはらしたとき、診療所で幸子をわずらわせてノドのあたりに薬をぬってもらったことがあるが、その時彼女が、小柄だが色の黒いキリキリした敏捷な女であるという印象をうけただけだが、家庭で、あったときには、伊沢と同時にしゃべり出して、お互いにあいてがじゃまだ、と思っているかのようであった。妻として厳然と夫のそばにくっついていて、身の廻りの世話もするが、客に用心ぶかい眼を放っている妻というものを、私はいくにんか知っているが、幸子はそうではなかった。私が主人の友人であるのか、診療所で世話になったからきた自分の友人であるのか、見定めよう

としている気配があった。そしてそれがどちらともわかりかねるとなると、争うようにしゃべりはじめ、伊沢と同時に口を切るのであった。もっともこのときは、私はウワサ屋の道子につれられて行ったのであるし、私個人としては、男よりも女に興味があるのだから、まさにどちらの客というわけでもなかったわけだ。

「都会の女学生は、社会の問題について積極的に参加しようとしていますか」と道子が私にきいた。

「街頭でよびかけている学生が、かなりいるが、選挙のときもアルバイトでおなじようによびかけている」と私は答えた。一年前のことだ。「まったく村ではたいへんだわ、ねえ、おくさま」と道子がいった。幸子は返事をせずに、私の方を見ていた。「幸子」と伊沢が呟やくようによんだが、伊沢はふっとそのさきはやめてしまった。

幸子はそれから、私達に背中をむけて鏡に向い化粧をはじめた。私はそれを見ながら、これは自分達がよほどバカにされているか、あるいは、……私にはそれ以上考えるのがつらい気がしたことをおぼえている。

第一章

「タリナイ、タリナイ、タリナイ」

幸子は歌うようにいった。

彼女が「タリナイ」といったのは、金のことではなかった。伊沢は幸子のいう意味が分っていたが、畳の上をはっている村の、肥えたアリを見ていた。そういう要求がないくせにもう今夜あたり例のことをしなければ、と思った。

「いくら何でも、せっかく合意の上で、ベッドを二台買いこんで、ベッド生活をはじめたばかりだというのに、もうベッドがじゃまになるなんていうのは……」

彼はめんどくさいが、もう一回会話を開始しないことには、それこそ、「ああ、今日は何月何日だったね」といったふうな、とんでもない、ふざけたことをいってしまいそうなので、口を切った。それは全く誠意のない口調だった。

「でも実際そうじゃありませんか。こんなに不便なものおいとくなら、私はとても。私はだからこれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.